



Club Palette Vol.46

カラーの最前線を歩く Vol.20

季節の移ろいを、美しい糸に染めて織り上げる Sumiko Honda ブランドの魅力の源泉とは？

川島織物セルコンのSumiko Hondaブランドを牽引するテキスタイルデザイナー・本田純子さんは、デザイン画から、糸の選定と色出し、織物設計まですべてに携わる類まれな存在。

四季の移ろいをテーマにした、本田さんのつくり出すファブリックの清々しく美しい色と質感は、糸が何種類も組み合わせたり、陰影を含み、見るものを一瞬にして魅了する。

インテリアの世界に新しい息吹を吹き込む織物の可能性と魅力を、本田さんに余すところなく語っていただいた。



本田純子 さん

川島織物セルコンのインハウスデザイナー。米国国立スミソニアン協会の所蔵となるファブリック設計を手がけた実績をもとに、1998年にSumiko Hondaブランドを発足。以来、他ジャンルのデザイナーやアーティストとのコラボレーション、Maison&Objet editeursへの出展などを通じ、国内外から高い評価を受けるなか、その世界を結実させるコレクションの拡充と飛躍を旨とし、挑戦を続けている。日々の生活、自然や工芸品からインスピレーションを得て、原画を手描きで制作。糸の素材や色、織組織を厳選し、すべての工程に一貫して携わる真摯な姿勢が、織技術の特許取得やグッドデザイン賞受賞につながっている。

織物設計から仕事をスタートしたことで 織物のすべてを知るきっかけに

一本田さんは、デザイン画から糸の素材と色の選択、織物設計に至るまで、すべてに一貫して携わっていらっしゃるとお聞きました。テキスタイルデザイナーでそういう方は珍しいんですね？

そうかもしれませんね……私は、「日本の四季を愛でる」というコンセプトで、四季折々のイメージに寄り添い、そこから感じられるモチーフを手で描き、織物を組み立てています。最終的な織り前での確認も含め、すべての工程において関わっています。

—そういった独自のやり方でお仕事を進められるようになったきっかけは、何ですか？

もともと私は、武蔵野美術大学時代に、テキスタイルを専攻していました。大学ではすべての工程に関わり、手作業で織物をつくり上げるのですが、織物会社に入ると、そこはすべて分業になります。私自身は、織物の設計の仕事を行うという名目で入社しましたので、当初は、他のメンバーが描いた絵を織物に組み立てるという仕事に十数年従事しました。

そんな私が、デザイン画から関わるようになったきっかけは、上司がブランドを立ち上げ、「デザインから描いてみたら？」と勧めてくれたからです。

そして、次第に現在のような仕事の進め方をするようになりました。

—Sumiko Hondaブランドの織り糸を拝見しますと、光沢や色、質感がとても美しいのですが、こういった糸の素材・色を決定する際のご苦労をお教えてください。

それがとても幸運といえますか、当社は染めも京都にある自社工場で行っていますので、色出しや素材の選定について、私はあまり苦労をしたことがないのです。

デザインの原画を描くときに、使った絵の具の色を色コマとして描いて、絵のまわりに残しておき、そこから、色チップ、カラーの指示等をさせていただくようにしています。描く際に使った色そのものから、独自に指定ができるので、色のぶれは少なくなります。既製のカラーチップを用いて色出しを行うわけではありませんので、この点が強みだと思っています。ふつうは手間がかかるのでなかなかそこまでできないものですが、恵まれていると思います。

—御社の職人さんの素晴らしい技術があるんですね。

はい。本当にそうなんです。私は「まさにこの色」というものを色指定するわけですが、職人さんたちは、指定した色だけでなくその前後の色までビーカー染色で出してきてくれます。

色は、光の加減や糸の種類で見え方が変わります。それを職人さんは心得ていて、私が指定した素材で、私が感じる色がどんな色合いなのか、ということも含め、指定した色以外にちょっと濃度を濃くしたり、色みにヴァリエーションをつけたり、あるいは明度を落としたりして、5-6色、近い前後の色を出してくれるのです。

ですからこの時点で、すでに色についてはすごくクリアになっているとも言えます。



デザインの原画のまわりに、実際に使用した絵の具で色コマを描いていく



職人さんによって染め上げられた豊かな色合いの糸

肉眼では見えないほどの極細の経糸と 鮮度が高く発色の美しい緯糸が織りなす Sumiko Hondaブランドの世界観

—Sumiko Hondaのファブリックって、立体感があって、織りが非常に細かいんですね。糸の使い方も複雑で、たとえば黄色を表現されるときでも、同色系の何種類かの糸を巧みに重ねていらしたり、ぼかしみたいな部分では織り方を変えていらっしゃるりするのですね？

同じ黄色を表現するのでも、今おっしゃったように濃淡をつけたり、糸の色の種類を変えたりしています。糸そのものの違いと、織物という構造物にしたときの違いとがあって、自分の指定で染めた糸をどういうふうに組み合わせ、織物として完成したときにどのような色合いにするのか、計算すると言ったらちょっとおこがましいかもしれませんが、想定しながらやっています。織物は立体ですので、どういう組織をどのように組み合わせ、密度をどうするかで、色の仕上がりが全然変わってくるんです。構造物としての色の奥行きと言いますか……

—なるほど、三次元の世界なんですね。ご自身でデザイン画を描いていらっしゃるときは、そういうことをあらかじめ意識していらっしゃるのですか？それともインスピレーションが先にあって後から形に落としていく？

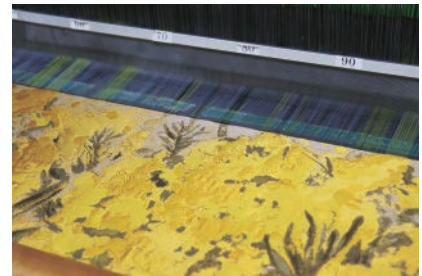
私は、どうしても本業が織りですので、描くときには、最初から織りのイメージがついてきてしまいますね。どういうふうにつくるのかも含めて。

最初はふわふわしたラフスケッチで、絵を描くのが好きなひとりの人間として描いているのですが、それはあくまでもファーストタッチで、次第に、織物としてどういうパターンで繰り返していくのかとか、といった構造的なことも考えつつ、描き進むようになります。

—インテリアの一部であるファブリックは、1日を通して見るものですから、朝の光、昼間の光、ライトの光では見え方が変わってきますね。その辺は意識していらっしゃるのでしょうか？

厳密に、何時何分にこの色がいいとか、正午の光は赤みがあるからこうしたいとか、1日のすべての時間帯を私が把握してつくっているわけではありません。逆にどんな状態においてもある種の美しさがあり、ファブリックのあたたかさ、そこからもたらされる喜びがある状態。それを目ざしています。ですから、どんな光のもとでも美しいもの、どんな状況にあってもそれなりの表情を見せてくれることが重要です。

そこが織物の面白さで、私自身、織物に助けられているところでもあります。構造物として正しい、きちんと美しい構造を成していれば、どんな光でも美しく見えるはずですよ。



極細の経糸と色みの美しい緯糸が作り出す織物の魔法



制作中の本田さん

もし、表に走っている糸が、裏でちょっと粗野な感じで組織されてしまうと、そこは透けて見えてしまいます。三次元の世界なので、実際に表には見えないところで糸がどう構造しているかが大事です。そこを綺麗に緻密に整えていけば、どの角度やどの光で見ても美しい織物となります。そういった意味でも表面だけでなく、裏の組織も一緒に考えていくことが、複雑で美しい仕上がりに結びついていきます。

—光が当たるとすごく表情が豊かになりますね。

私が持っているイメージは、朝目覚めて、お日様が当たって最初に目にするものが、ドレープじゃないかと…そう思ったときに、朝の目覚めのファーストイメージが華やかで明るく、今日一日を応援してくれるような美しさがあるもの。そういうものを意識しています。Sumiko Hondaブランドのいいところは、経糸がすごく細くて、目に見えないぐらいのもので織っているのです、そのまま裏地をつけない状態では、光を透過して水彩画のように透明さが感じられるところだと思っています。

配色はコーディネーションを重視し シリーズの中で互いに関係性を持たせて ブランドイメージを損なわないものに

—同じデザインモチーフでも、ベースとなる色によって雰囲気はずいぶん違いますね。同一モチーフの中での色展開については、どう考えていらっしゃるのでしょうか。

たとえば、今年のイメージは、梅です、薔薇です、ミモザですといったときに、本来のそのモチーフらしい色を、必ず一色は入れるようにします。そのほかの展開色の配色に関しては、今までのシリーズとの縦横の組み合わせも考慮します。

今年梅の赤をつくりました。でも、それがボンとあるだけでは横とのつながりが難しいので、この梅に合うものをもう一色つくります。梅と言うと白梅もあります。そうすると白い梅に対して背景は何色がいいのか?となつて、すんなり調和する色を考える。そこはコーディネーションですね。その際に色みを感じない、ニュアンスを感じない色は排していきます。



Sumiko Honda シリーズ

—日本ではインテリアというと、まだまだ無難な色が多いですね。その点、
本田さんのファブリックで画期的に部屋の雰囲気が変わるといのはす
ごいことかと…

ありがとうございます。それはあえて、私自身が挑戦していることです。

インテリアというと、明度や彩度があまりなくて、馴染みやすい色が、日本では好まれがちですが、やはり色には非常にインパクトがあると私は考えています。ですので、インテリアのなかに、ポイントとしてだけファブリックを取り入れるのではなく、カーテンなど大きな面積でお使いいただき、四季を感じるというテーマ、色のちからを感じていただくことが大切だと思っています。その点、織物は多くの色を混色しているのです、鮮やかで豊かな色合いが表現できますし、たくさん色が混ざっていても、濁ったりどぎつくなったりせずにお部屋の空間に自然と馴染むところが、特長ではないでしょうか。

ですから、カーテンのようなファブリックに関しては、皆様にもっとリラックスして、どんどんトライしていただければ嬉しいです。今の気持ちに寄り添うデザイン、好きな色合いを選んでいただけたら、楽しいと思います。

これは実際にお客様から聞いた話ですが、介護していらっしゃるご家族とお世話をされている方がいらして、Sumiko Hondaの薔薇のカーテンを吊ったら、双方ともにすごく元気ななれたと。それぞれの方が抱えていらっしゃる現在の生活のなかに、元気を与えたり、励ましたりすることができる一つの要素として、色合いやクオリティの高いファブリックが少しでもお役に立てる幸せを感じています。そういう意味では、ここ1～2年ですが、介護施設や病院などから、カラフルなものを、とオーダーを受けることが増えてまいりました。そのことを、本当にうれしく思っています。

—ループで組織を見せていただくと、本当に感動します。先ほどおっしゃっていた経糸って、肉眼では見えないうらいに細いんですね。

糸の色が複雑に絡み合って、万華鏡のように見えます。

この経糸があるからこそ、透明感があって、軽くシルキーな織物が表現できるのです。

たとえばこのピンク色の部分は、中層の糸が透けていて、このようなニュアンスのピンクに見えているんです。これって薄ピンクなのですが、2枚の薄い布の中にピンクの糸が走っている。このように表面ではないけれども、表層や裏の組織が干渉し、影響し合っって見えてくる糸もあって、複雑な色みや味わいが出てきます。

手織りではなく、織物の機械でこれだけ複雑なことができるのは実に素晴らしいことです。



施工例：介護付有料老人ホーム すいとぴー東戸塚
写真撮影：Tomokazu Yamada



正面の花が見える部分
(織り組織がさらに複雑に見える)

色の世界と音の世界は似ていて 機を織る音は心臓の鼓動に近い

—織物の組織を拝見していると、目には見えていない色の糸も、実際には入っているんですね。それが奥行きだったり、あたたかみにもつながっていく…

はい。この模様は姿綴じといって、よく帯にあるような組織で花びらに沿って形を起こし、花びらの曲線に沿って、緯糸を綴じています。刺繍のように見えるかと思います。

経糸もここでは何本か使われていて、色もさまざまなので、陰影が生まれます。

そういう意味でも、冒頭でもお話しした織り糸の色がすごく大事です。組織を成す織物の中で、一色の糸でも色が濁ると、全体のトーンはどんどん濁っていきます。ちょうど絵の具を溶くバケツの水が、筆を洗う度にどんどんグレーになっていくのと同じです。ですから、いかに鮮度の高い色を組み合わせるかが大事で、実に奥が深いです。

商品になるまでにはファーストタッチ。試作をつくって、それを修正していきます。工程の中で、そこが一番私は好きですね。ですから、最初に機前に試作の織物が出てきたときは、びっくりするんです、今でも。何かみんなの力がギュッと集結した感じでそこに現れるので。最初絵に描いていたものが、織物という立体として出来上がってくる。この感動は何ものにも代えがたいです。本当に感動する瞬間です。

そして機を織る音のリズム!「トン、トン、トン」という規則正しさが、まるで心臓の鼓動みたいに心地よいのです。

—色はとても感覚的な世界ですね。

はい。色は音と一緒に、感覚にストレートに触れてきますね。私は日ごろから色のインパクトと音のインパクトは似ているじゃないかと思っています。どう調和していくかという点も似ているし、直接力を呼び覚まし、エネルギーにもなります。

—本田さんがテーマにされている四季には、
どういう意味があるのでしょうか。

私自身が、四季というものを非常に大事にして毎日を暮らしていますので……。

最近では、季節感が希薄ですので、それぞれの季節の変化を大切に感じ、元気をもらっています。以前は、庭先の自然や季節ごとの歳時などから、四季を感じる機会が多かったように思いますが、いまや私たちの住まいから自然がどんどん遠のく傾向にあります。ですから、ドレープなどのファブリックを通して、四季を感じていただきたいと思っています。



中間色の展開もシックな中に華やぎが

—これからは、どんなファブリックを制作されたいですか？

Sumiko Hondaの従来からのシリーズを、大きく外れることはないと思いますし、引き続き四季や自然界について表現したいと思っていますが、具象と抽象が融合したようなものも、表現していけたら、と考えています。

この黄色いミモザシリーズがちょっとそれに近い形です。ミモザの粒はこういうふうに表示していて、あとはかたまりとして表現していますので。最近では具象のものを抽象的表現に少し近づけるという試みを始めたところです。黄色いドレープは、従来は絶対難しい色だと言われて、ない色みでしたが、現在ではSumiko Hondaシリーズではとても人気のある色です。

元気が出る光の色をイメージしています。いろいろとチャレンジしてみたいと思います。

公式テキストのここを

Check!!

下記のテキストページに今回のインタビューに関連した内容が掲載されています。

「1級公式テキスト 第1分野 ファッション色彩」

P.104-105 第4章-2 テキスタイルの組織と色彩

P.204-205 第9章-1 2テキスタイルの色彩計画